

異人休息之図



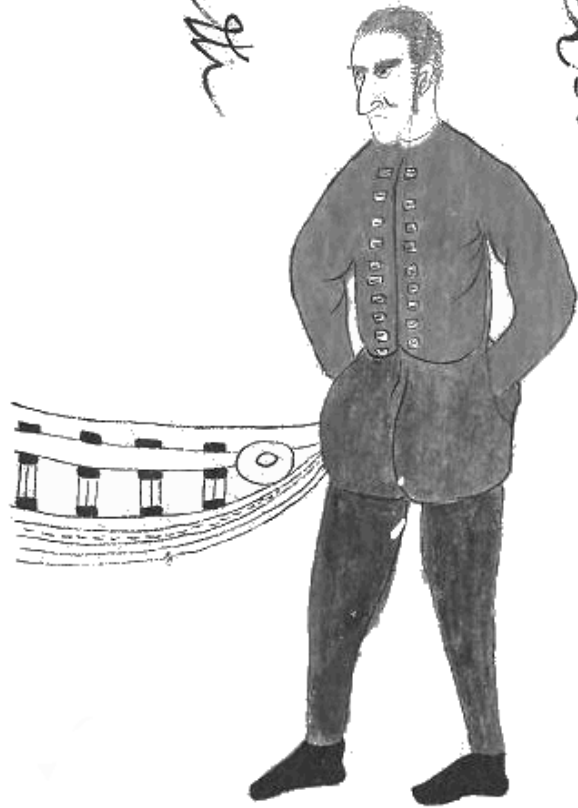
文字ハ直立○ひ市文字ニテ分ラス

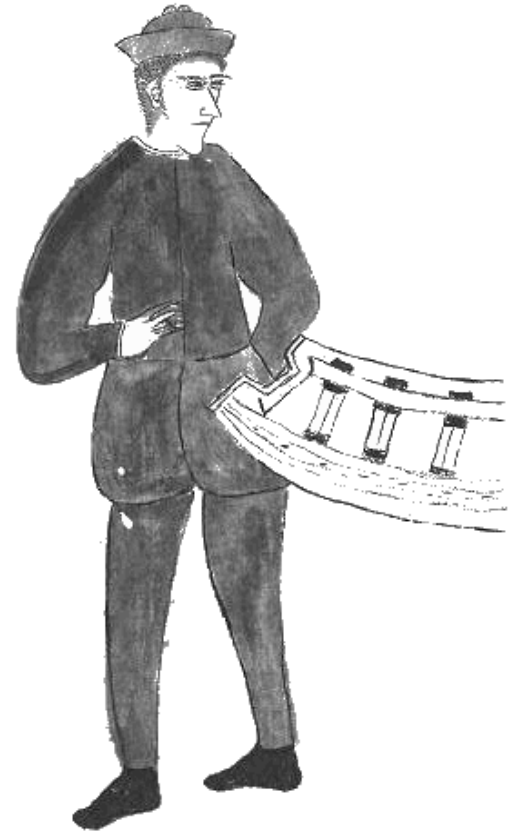
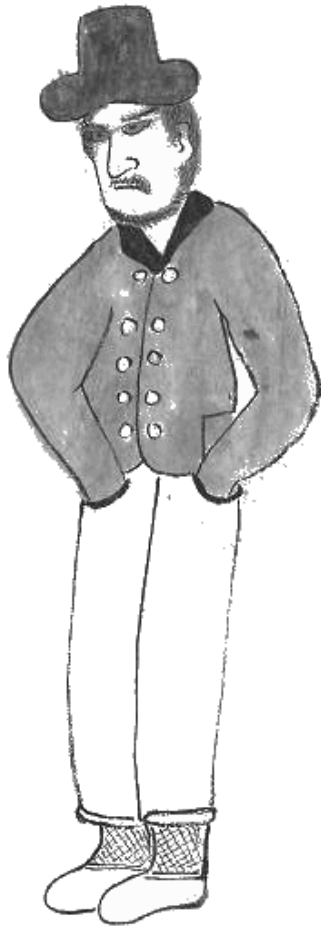
インギリス

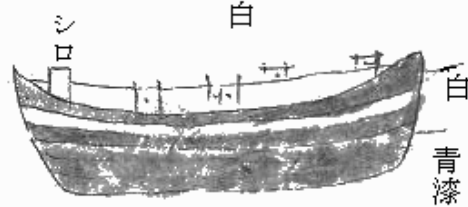
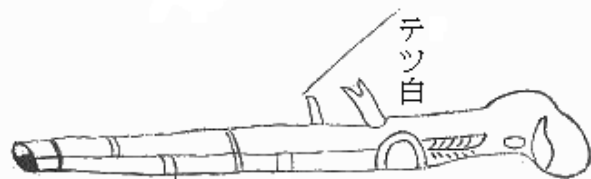
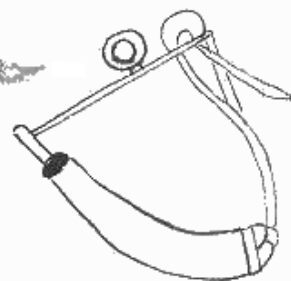
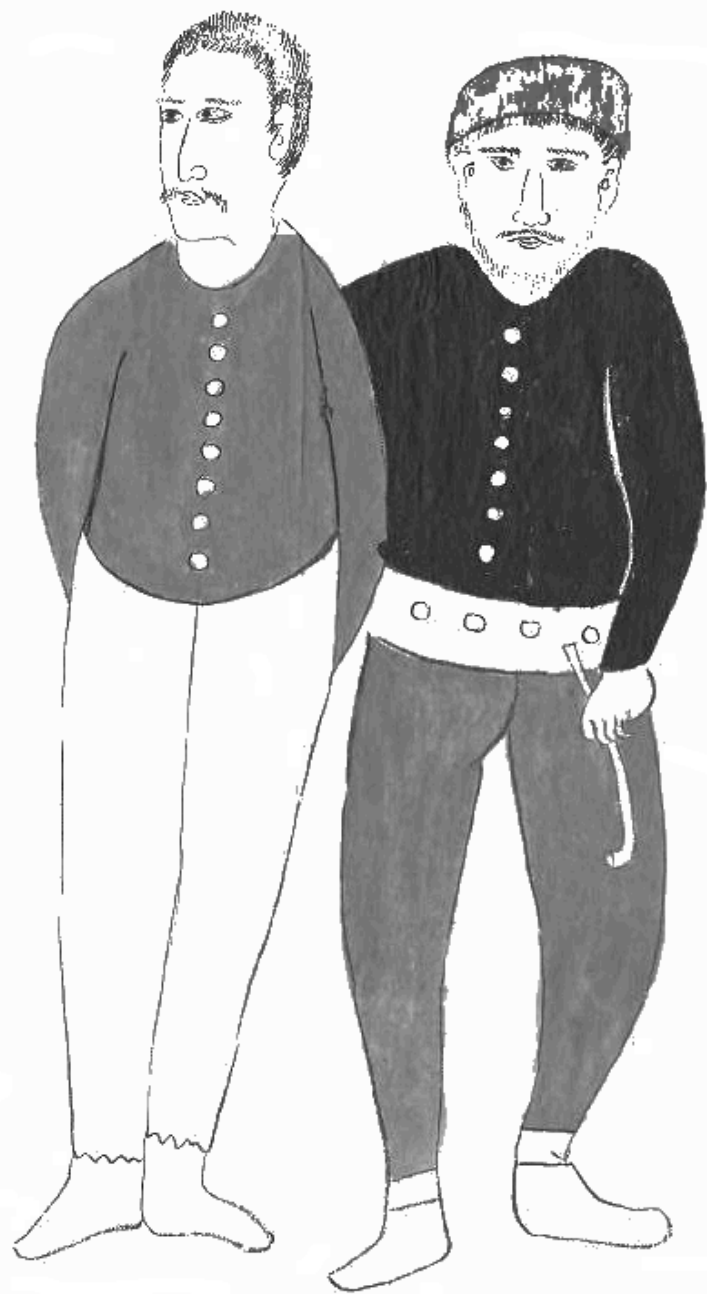
England

レツヂツ

Evergeth







異人名

国ハ

ヨリヤ
諳厄利亞

人十二人

内三人加比丹

又一人ハ亜黒嘉

ゲヒサ

ケンブ

ワール

ケヘン

シメリ

リヤウナール

ブラテン

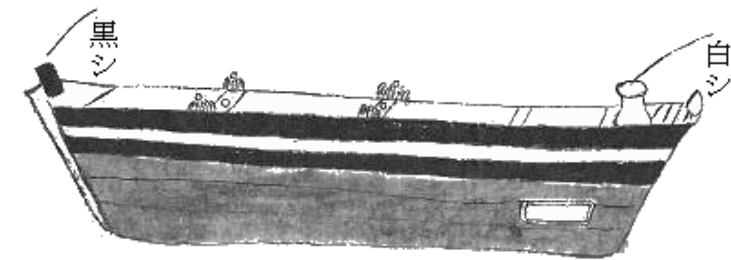
チャールホウ

ルケン

デピス

テトラン

メトトン



転馬船

申六月七日公儀より御下の人々

覚

御代官

古山善吉

・若党二人 鑓長持▲

具足若立弓。等供廻十七人程ひき馬なし加籠にて

於本三町目宇兵衛方ニ御賄朝夕吸物一酒取肴二種

本膳一汁五菜薄茶干菓子御使者小従人

忠三郎若党一人鑓草履取□若

右へ被下物龍紋三反千うき七尺

同手代三人へ

宇兵衛方にて一汁四菜酒なし

右三人へ被下物金式百疋宛塙下より

天文方御宝蔵番

足立佐内

右於本三町め小松屋清助方御賄朝夕一汁五菜吸

物一ツ御酒取肴二ツ

右具足若鑓若党一人そうり取駕籠にて上下四人

御使者忠三郎被下物龍紋二反

通辞

吉雄忠次郎

右於本三町め清助方供若党一人草履取一人駕籠にて上下三人

御賄朝夕一汁四菜御酒取肴一ツ吸物なし

被下物金五百疋御使者塙下

御普請役元締格

川久保忠八郎

右若党一人草履一人上下三人駕籠にて

但そより取ハ病き
にて歸し候此方より雇參
候由

於本貳町め絹屋嘉兵衛方御賄朝夕一汁四菜

御酒取肴一ツ吸物なし被下物金三百

疋

一 惣次通一汁三菜香物云々云々

一 六月七日三町めへ着三日道中にて昼八ツ頃着翌朝被下

物有之二付六ツ半過出立給仕子三人袴にて

出ス問屋話切にて世話いたし候但御代官一人御町同心

一人吉田大工町迄出居宿迄案内外八十人組頭案内八日

朝も新丁六町め右同断

一 六月十四日四ツ時三町めへ右方々着小幡止ニ被登可申候

歸り候所十三日ニ大津より先触来二三日延引の旨

是ハ十二人ノイキルスモノ伝馬舟にて乗歸元舟不見候由にて大津近所へ着候共又候他

領へ着候共申一向ニ風聞なし又右十二人御代官所の了簡にて帰御家へ更ニ相談無之に付

十二日ニ御家御役方より御代官へ右の儀答被申遣候テ夫ゆえニ延引候も申十四日迄

御代官延引次第と異人等いつれ着候やの儀更に不訳

但異人被歸候節鶏百羽ねぎ大根沢山ニ渡候て被遣候由

史館惣裁藤田次郎左衛門殿此間其方ニケ所へ被參此度の異人御歸にてハ成間敷候と

申所酒など出婦人二三人シヤクニ出なくなまれ候由にて指ちかへ可死ニ存候由

誠ニ不通の咄にて早ク歸候事専用申され存付の見風説併うそニ可有之也

御代官所寺西十次郎殿役所

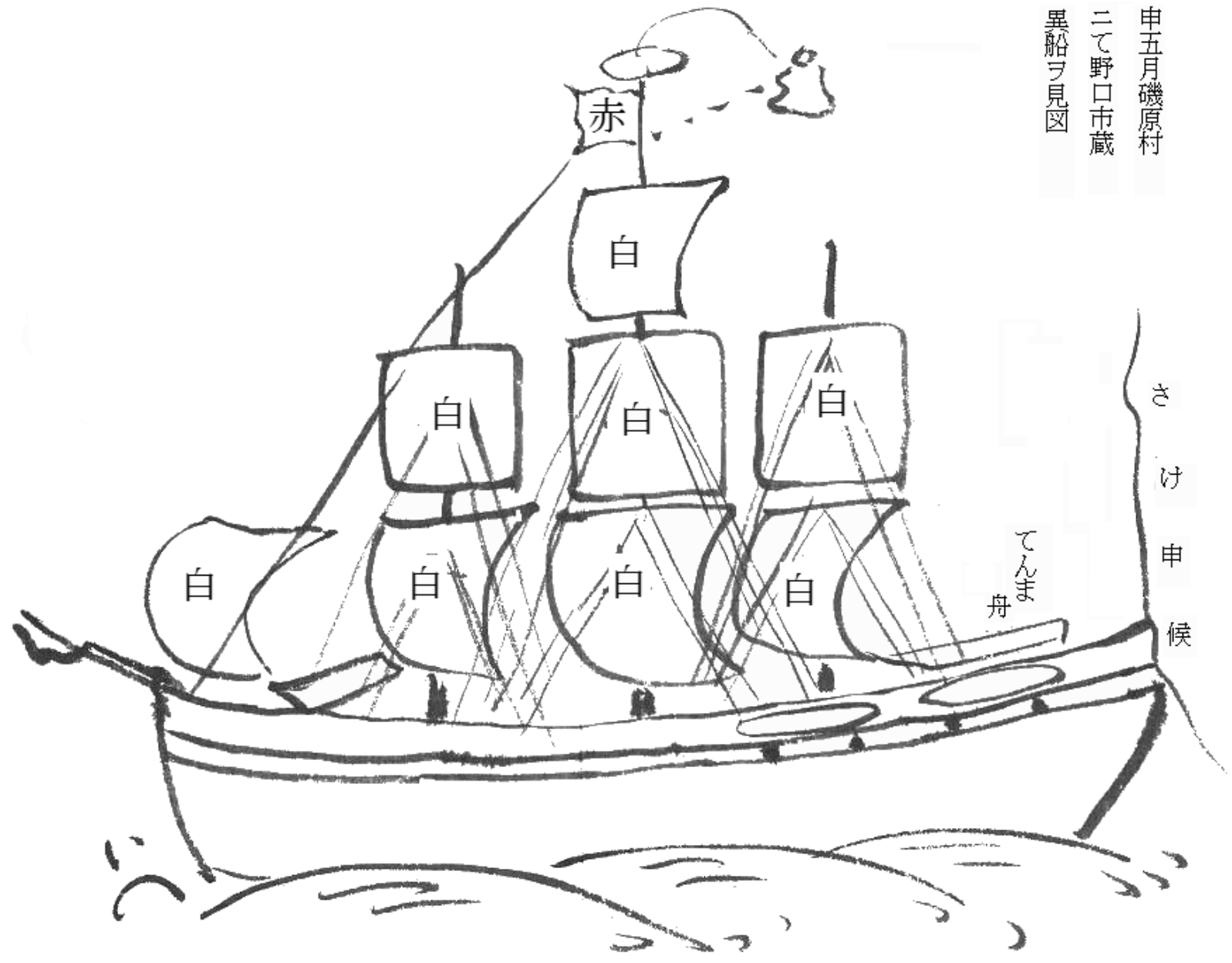
小名浜又ハ本多弾

正少弼殿御領地ユナカ

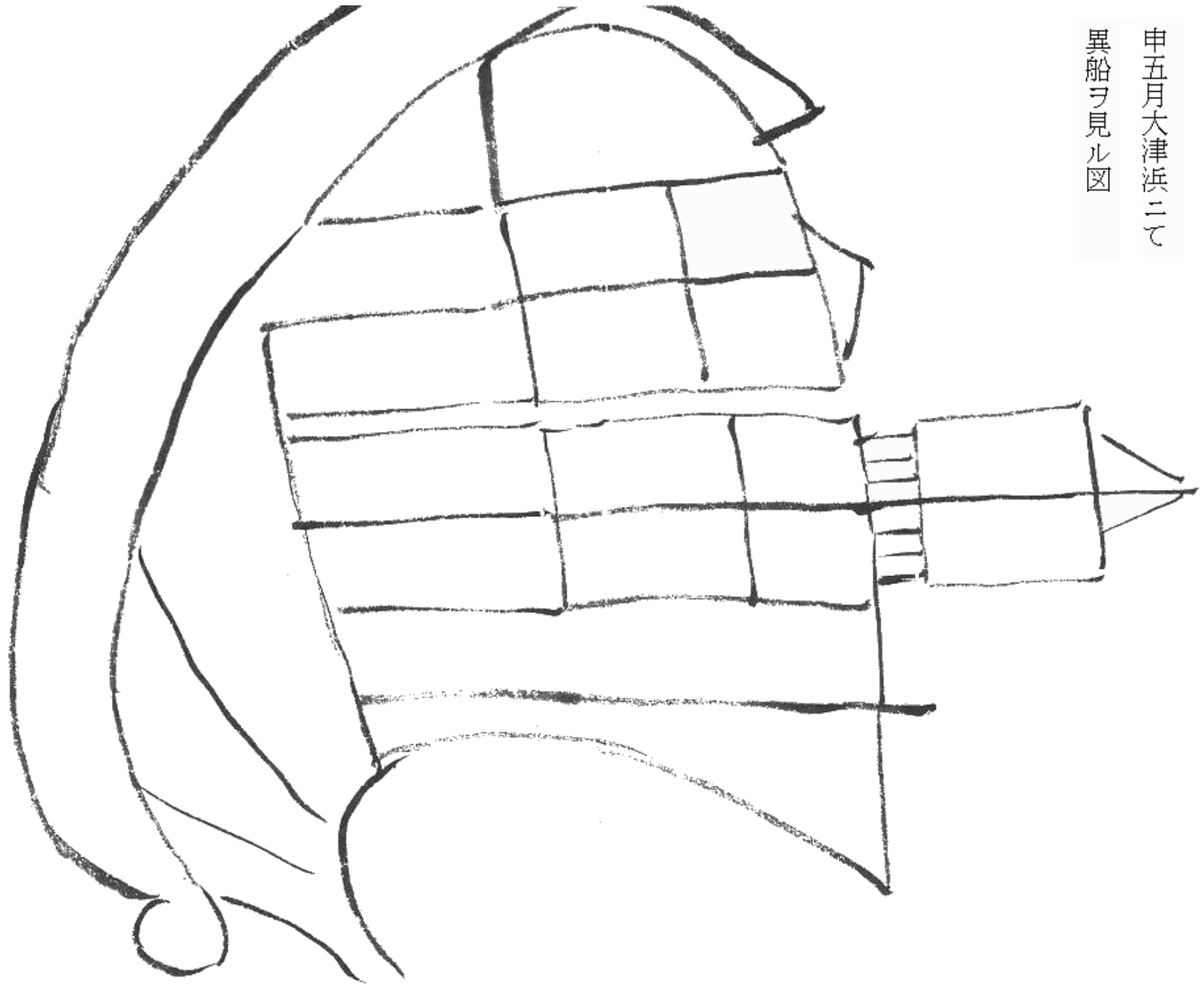
イ共申此所へ二艘ノ舟

十一日差口由

申五月磯原村
にて野口市蔵
異船ヲ見図



申五月大津浜にて
異船ヲ見ル図



GIBSON SHIP INDIAN

ANN & CAPTAIN

SHIP KEMD.

CAPTAIN

中山侯家臣
取向へ此度
の異国人ニ認
賞候由

文政七甲申五月廿九日夜

一番手御人数御先手物頭

庄 勘衛門
矢野九郎衛門

御目付

近藤 儀大夫

筆談役

会沢 恒蔵
飛田 勝太郎

御徒目付

住谷 七之亮
菊地 三之丞
千賀 三大夫

大筒

高山 勘左衛門

大筒

高山 角馬

同六月朔日伊師浜村へ詰

御先手物頭

北河原甚五左衛門
藤田繁蔵

御使番

榎本四郎兵衛

大筒

兼子八十衛門 藤田林衛門 同介十郎

吉川甚六郎 小池七大夫 小泉才次郎

桑屋善太郎 兼子庄三郎

御徒目付

益子庄三郎
逸見儀左衛門

湊詰

御目付

笠井半大夫

御徒目付

萩 介衛門

大筒

竹谷忠衛門
岡部五郎衛門
田戸部源藏

檢使

野村寛衛門

御目付代

渡辺伊衛門

中山備前守組付触頭

山本三郎衛門

組付

鈴木忠次衛門

石山彦衛門

松岡市左衛門

福王半藏

小松軍藏

菊地小三郎

金子七之丞

川村富三郎

有賀喜衛門

芹沢又衛門

中村与左衛門

皆川弥六

土井寅次郎

津川伊平太

長谷川軍衛門

三浦与衛門

西郷半左衛門

立花源衛門

小田倉左仲

加藤一平

松本伊之丞

三村伝左衛門

坂場彦助

岡本治郎兵衛

小松甚之丞

矢野只之丞

原田善衛門

同六月六日松川御加勢先大貫迄

御先手物頭

中山庄司左衛門

楠 七平

御使番

此方何か滞分有之御免ヲ被

三木陸衛門

蒙候へ共不濟夫ゆえ六日夜八ツ

半頃御評定所ヲ御繰出候由

大筒

柏軍次平

森本平八

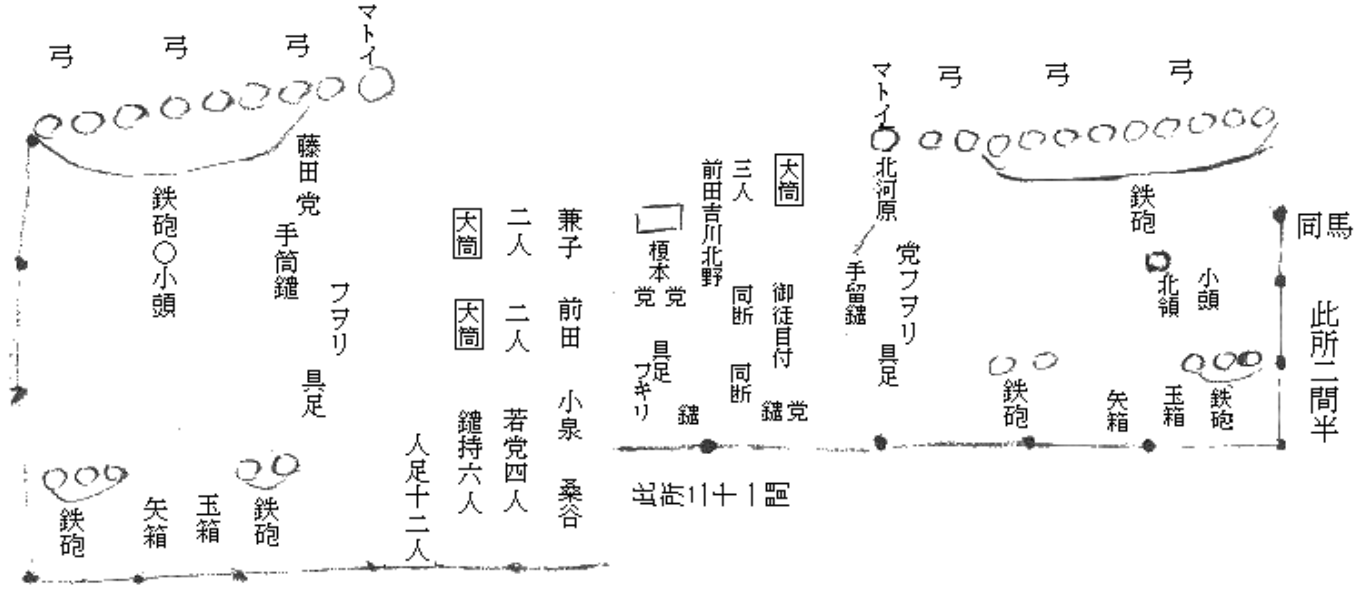
御矢倉方御蔵方御普請方都てへ御矢倉方出候由御座候

数々御出二付右の内御新造宛へ翌日被罷出候由

右ハ御評定所へ詰夫より御くり出尤御老中御若年寄其外共二

一役一人詰候て

川尻村海ニ船見へ申候節出張候陣立



去ル八日早朝吉里計先キへ船見へ申候付俄ニカタメ申候

去ル八日異船四艘見へ申候ニ付固メ申候

石浜邑海岸工船見へ申候付郷士固々場也

郷足輕

五 十 人



足 足 足 足 足

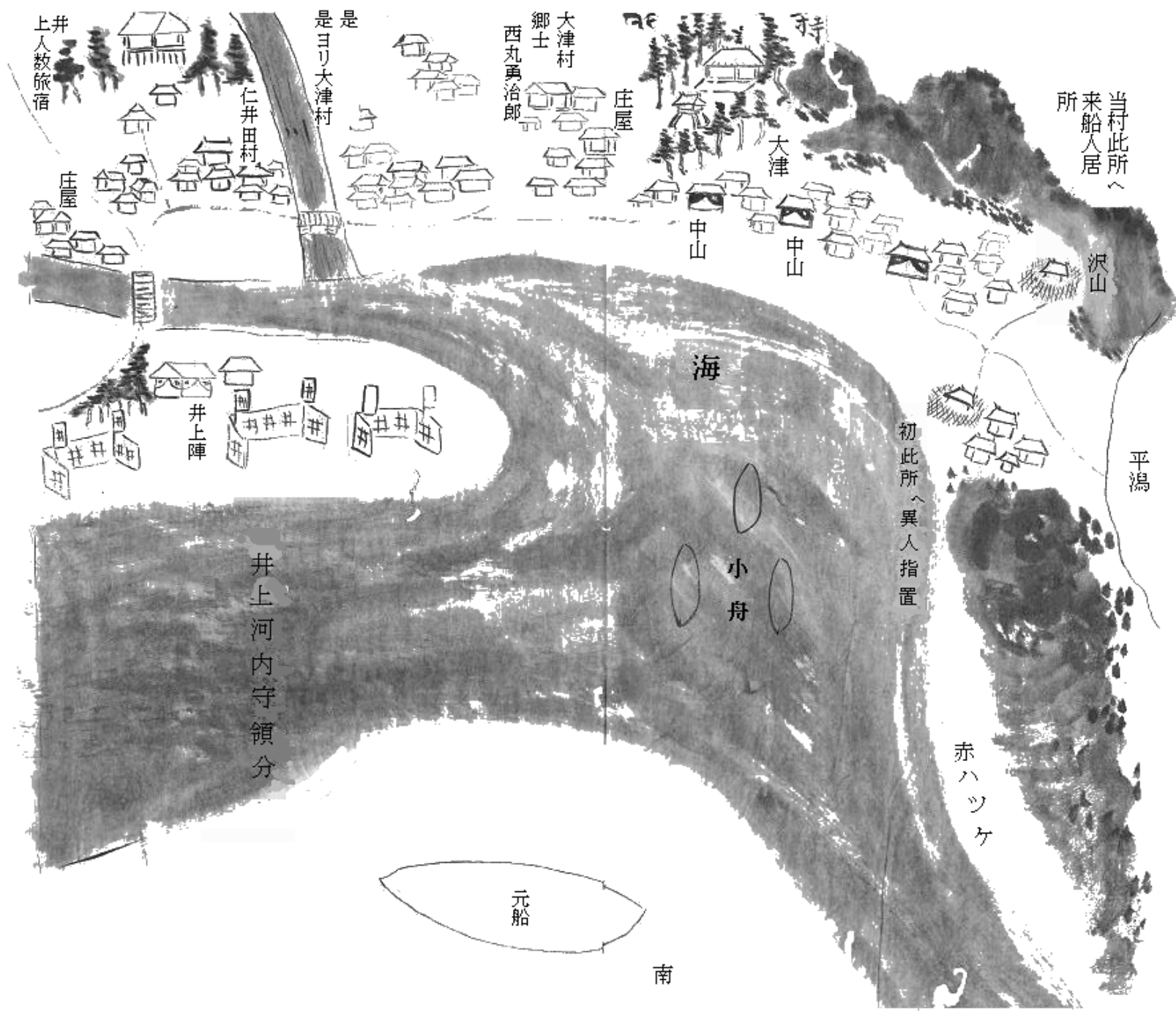
○ 郷士
北条平馬

○ 郷士
増子忠太

○ 郷士 若党
増子民部左衛門
具足箱 鐘持

○ 同 若党
菊地小八郎
具足箱 鐘持

○ 同 若党
石井長工門
具足箱 鐘持



当村此所へ
来船人居
所

沢山

平潟

初此所へ異人指置

赤ハツケ

海

小舟

元船

南

是是
是ヨリ大津村

上井
旅宿

仁井田村

大津村
郷士
西丸勇治郎

庄屋

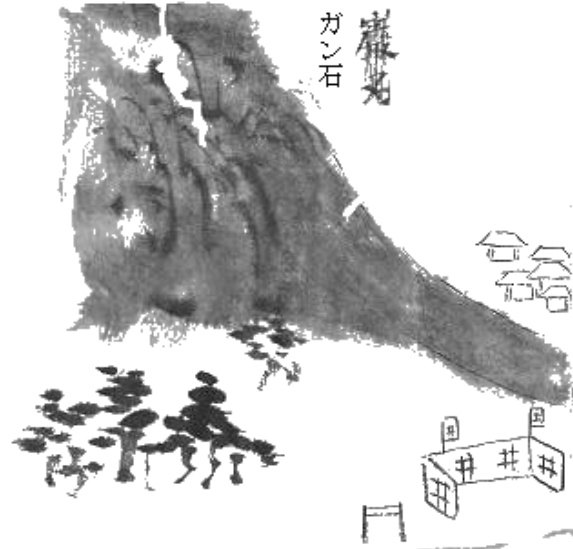
中山

中山

井上陣

井上河内守領分

巖石
ガン石



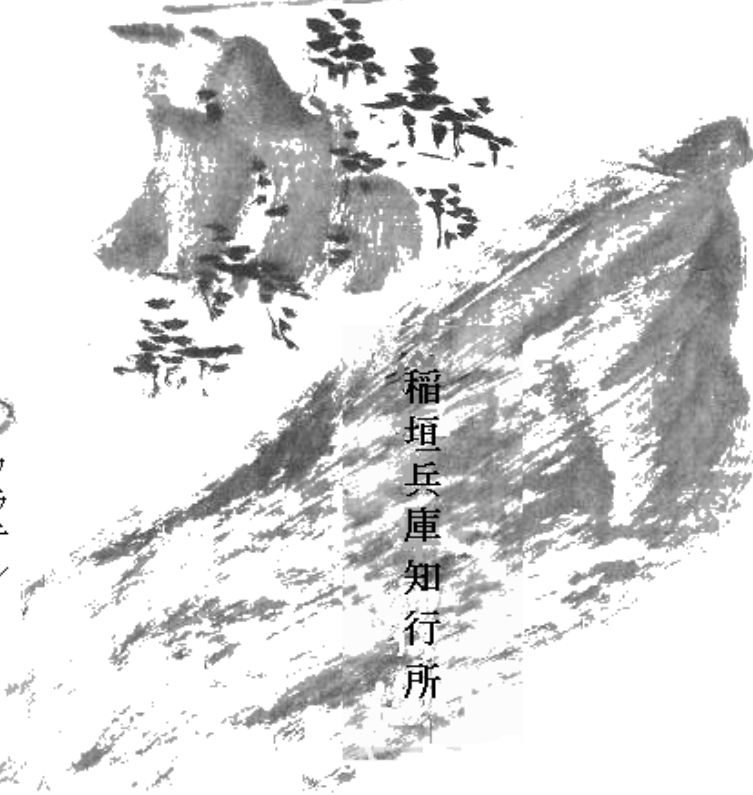
是ヨリ磯原ハ前
ニ有

田

諳厄ありカ人名

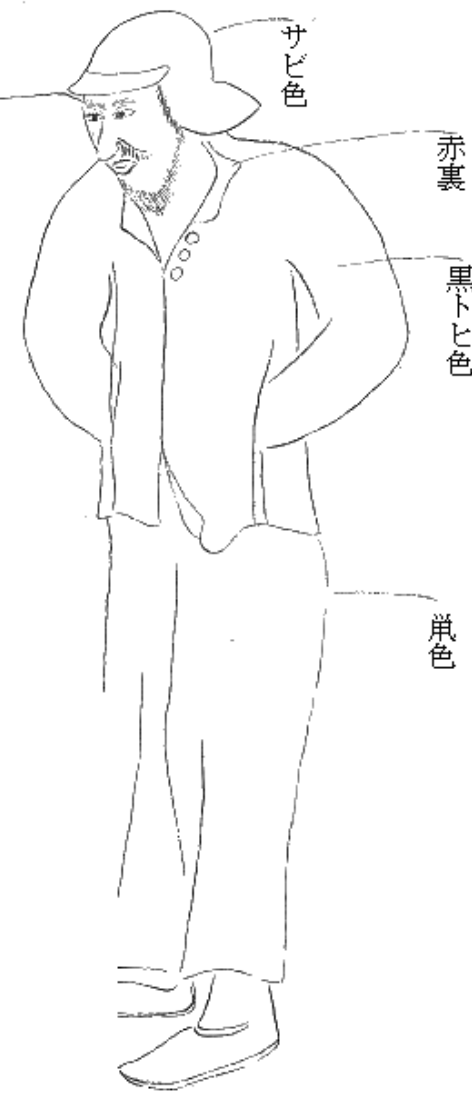
- けひさん
- ケヒサン
- けんぶ
- ケンブ
- わゝる
- ワ、ル
- けへん
- しめり
- シメリ
- リヤなゝる
- リヤナ、ル
- ふらてん

稲垣兵庫知行所



- フラテン
- ちやうしう
- チャウこウ
- るらん
- ルチン
- テルス
- てとらん
- テトラン
- めとらん
- メトラン

二艘十二人乗ニテ鉄砲四挺羅紗の縫くるミハ頭分の由行儀能此者ハ髭ヲそり候也
 縫くるミのすそ心越派の衣のすその様ニ有之下官ハ此圖ノ通也都てぬいくるミ。

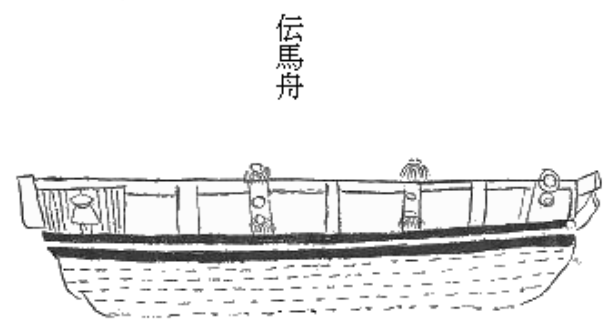


色赤目黄色

○初ノ内ハ渚へ置候由翌々日ハ大津浜の台ノ古家へ入置候由番人多付置候由喰事米等を
 渡其者共自分と拵候て用候由手先ハ強候へ共とり組候てハ日本人より弱候由
 喰大根ねき等を好候ゆえめしハ至て少々用候由



對話ノ図



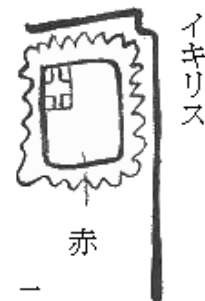
伝馬舟

煙管	豆	筆	脇指	首	茶碗	鼻	臍	乳房	ちんぼ	女この事
バイ	カナワシ	フライス	シヤウリ	フクス	カラフ	ノロシ	アサホウ	テウ	ホレッカ	カンツ

笛	大鞆	耳	目	鏡	ねぎ	箱	毛	銭	錫	繩
フロケ	カン	イタル	アイス	ロウケンラアス	ハイリノ	インキタン	フキトイヲシ	マナイ	イテネンカ	コフリ

命形	竹	ちよちん	くし	鉄砲	くち	ひたい	硯	傘	草履	躡
コ、キネ	ランホン	ヒヘウ	コフシ	マスケ	レッヒツ	テアム	インキリデン	アイフラン	アイフライ	ランス

《!!!VVV-VVW|||XIX
 ト 二 三 四 五 六 七 八 九 十
 一



二品赤モエキ

親方名
 ケンヒサン
 コ、メツ
 ケンヒス
 ナフル
 フラタ
 フテラ
 親方名
 ゲンツ
 キヨボラ
 メト、ン
 テウロウ
 フレルテラ
 キイヒツ

人数十二人

煙草を喰ふまたふく也
塩けをくハす生大根を喰ふ
生ねきをくふ酒一杯ツ、吞
干さばを喰ふ飯をくふニはし
いらす

こしより匙を出しくふ也思外少食也
鶏を喰ふ牛ふたをくふ

飯はち一ツへあまた集り喰ふ也
辞義合を知らすと見へ食事
するにも我まんに喰ふ也只親

喰初メを待事計也

大小用をしても手

をあらハすかん処

へ出入りまた外へ出ル

ともくつをはいて

まゝにて足を洗ふと

いふことなし日本人ヨリ鼻高し

目の色白し

髪の毛延ず毛赤し

人多きくくさき事

限なし但親分羅紗

衣類也時々着かへる也

其外は羅紗の様二見

え候てもとろめんのやうにも

相見へ申候但年頃ハ廿才より四拾才迄のやうに



相見へ申候



London
H.M.V.



本舟ハ三拾間
或四十間位見

申候

此伝馬舟

四間余

内外ともに

皆ウルシニテヌル

INCIBIS

インキリス

伝馬舟細板ニテ何枚ともなく造り

大船皆銅鉄ニてはりつめる内にひる

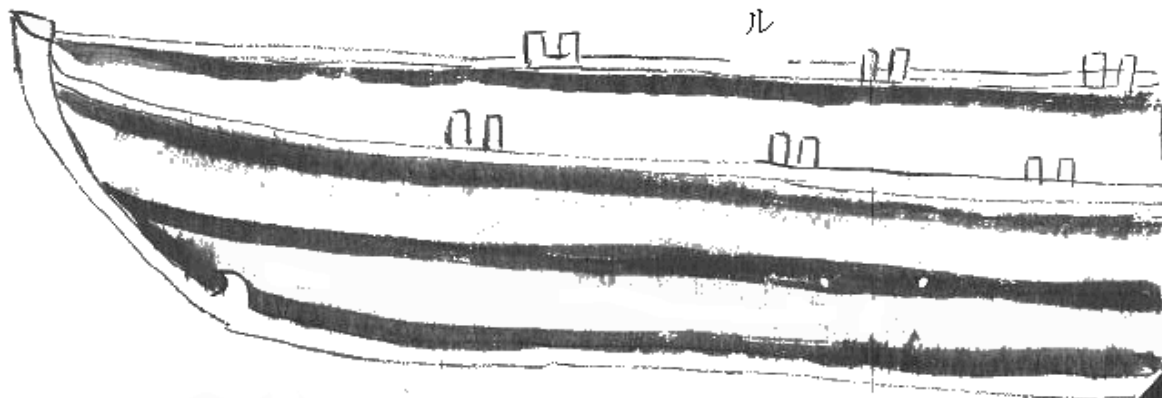
ところの障子あり

文政七甲申五月廿八日二大津浜ニ着

或人狂歌

なにをすしていつまでいかに異国船

人さわかしにはやぐいきりす





生写

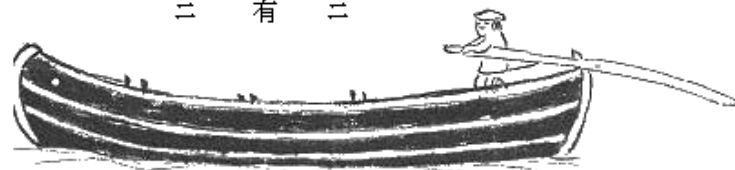
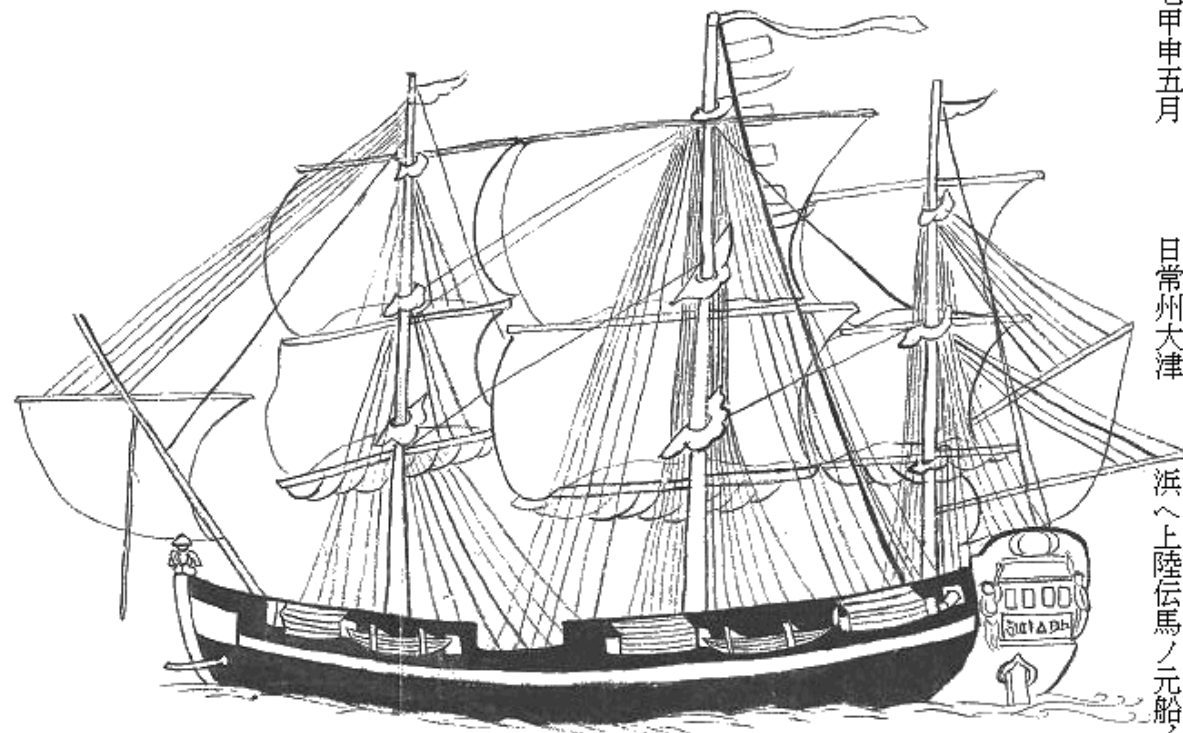
甲申五月於大津村



文政七甲申五月

日常州大津

浜へ上陸伝馬ノ元船イギリスノ由



イギリス伝
馬舟黒キ
シタ
青クヌリ
尤イツレモ
シツクイ
ナトノヤウニ
ヌリ又セイ
ヒツニヌリ有
此舟へ六人
ツノノリニ
二艘大津へ
上陸
且ロノヨウ
図の所カイ
計用ヒロハ不用候由。
鉄砲四挺ニモリ
等持参金銀銭
モ持参

カムリモノ



Handwritten signature in cursive Japanese characters.

カヨウニ
書イタシ
申候



中ニハフトヌノ島サトモアリ
毛トロメンサトモアリ
色々



イギリス
諸厄利西人名

アンケリア

カヒタン

ケヒカン

同

ケンア

ワール

ゲヘン

シメリ

リヤウナシル

フラテン

テヤーホタ

ルチン

テヒス

テーラン

メトトン

ミナミアメリカシンイ
南 亜 墨 利 加 新 諸 厄 利 亜 人

ナリ新イギリスハコンテント

唱ヨシ

いんきりす言葉

一	わん	二	ちよむ
三	れい	四	はあむむ
五	はい	六	せき
七	しやひん	八	あい
九	ないん	十	てん
てつほむ		ますけ	
△まゆひ		あひほむるし	
かみの毛		あうる	
は		ゆう	
した		たん	
かいな		あうむ	
手のかう		あん	
ゆひ		たむ	
五本ゆひ		へんかへる	



目	あい
はな	のうし
口	すう
み	いやうし
手を	あん
あ	ね
ほむ	ほて
きる物	ふうあげ
尺	ちかいる
五分	あへんし
六分	あてんし
壹寸	いんし
酒	くうてんけ

文政七申六月十日写

一 文政七申六月廿日方奥州相馬領へ右の伝馬舟五艘

着上陸十五人程有之ニ付押帰候由右ニ付両度江戸へ

早や登候由五町め問屋物語ニ候

文政七閏八月十

一 昨日 九日江戸出

御城出ニて上リ申候御書付ニ此度薩州表宝島

とか申候所ニて異国船着岸にて牛をもらひ度趣手まねき

にて申候ニ付一切相渡候儀ハ不相成候旨相答申候所其夜か又々

上陸いたし牛ニ足盗取其後又々参り一疋引出し申候所

を見付追かけ行鉄砲にて唐人一人打留申候由其後ハ

帆影も不見逃行申候由右唐人死骸ハ長崎へ送り

申候由申出候書付上申候其後海防手当致置候よし

ニ御座候右の唐人ハマンキリヤとか申候よしニ御座候

富之進

未七月か

昨日十九日 御城出ニて致一見候未七月八日方松平大隅守殿領地

七島の内エキリス人上陸牛一疋打殺持行其後又々

二疋生捕ニいたし端舟六七人乗と申事ニ御座候鉄

砲打ニて出役の御目付吉村九郎と申人鉄砲ニて

壱人打殺し右死骸ハ長崎へ送遣申候申出ニ

御座候

異国船上陸二付浜々へ御達書文政七甲申八月写

異国船年々遠沖ニ相見候所文政七五月廿八日当御領大津浜へ

上陸ニ付御手当御人数も浜手四五ヶ所へ御指出ニ相成候処

此度ハ変事も無之帰帆被仰付候扱又欲情ニ迷ひ候て

漁父共遠沖ニて内々交易の趣相聞異国の品物も世ニ出

候付此度浜々へ御達書左の通

近年異国船西北の海より東南の海にいたりくしら取に

事よせて沖の中に逗留春夏をわたり或ハ陸近

くこきよせ我国のよふすをうかゝひ或ハ洋中ニて我国

の漁人等を招き物をあたへてこれなつけんとする

志にくむへき事也そもゝ異国の船ハ其本国一方

ならずといへとも大てい横文字を用るの国々ハいきりす

にてもおろしやにても皆十文字のはりつけ柱をたつ

と云邪宗のものともなれハ平日の形気色柔和にして

愛らしく見ゆるハいつわりにて内心には深き毒をふ

くめる事必定なり万一我国の人民あやまりて彼

船に近付彼かおしへに引入らるゝものあらハ不便

の事也日本ハ

天照太神の神国にて人々自然に正直なる天性を

うけて前々より正しきおしへ少しも事かくる

事なしなんそなまくさくきたなき犬のゑひすら

か邪宗に。近付て神明の罰をかうむる事あ

るへけんや昔南蛮より吉(吉)利支丹の法をひろめ
しも其初ハ西洋の黒舟にのり来りて品ものを
交易せしよりたんゞに取入て彼か邪宗に引入国
を奪んと謀たる也日本の人これに迷ひてちうりく
にあへるもの前後およそ二十八万人に及とかや
かくのごとく莫太の人命を失ふにいたる事何
故なれハいさゞ舟を近付たるわさわわひによりて
なり

東照宮よりこのかた三代將軍家迄の間きひしく
邪宗を停止せられて其余類を絶ちしより

今に至迄天下の大禁となりて宗門の改め少も

ゆるむ事なし故に異国交易ハ長崎一ヶ所に定りてお

らんたの外横文字の国々ハ近付事を得ず難有

御法ならずやたつたん国の辺土とふき小島などの

如きハ其人禽獸同前にて正しき教もなけれ

ハおろしや人の教にしたかひ十文字の柱をあ

かむる所もありときけ候も

天照太神の御国ニ生るゝもの決してけからわしき

ひすの人に近付て東照宮以来の国法に背き

刑罰にあふ事をいたすへからす若異国舟より

あやしき書物又ハ絵図器物の類邪宗の品

らしきものを授与ふ事あらハこれを受へからす

たとへ其品と心付すもらひ置候ものあらハ家に留

おかす指出へし扱又異国舟の様子いふかしき

次第見当たる事ある時ハ速ニ其所の役人へ

訴出るにおゐてハ忠節たるへし国恩を忘

れしと思ハ、此心得尤かん要也

右件の趣浜方の役人常々油断なく村々へ下知いたし

浜方居住の船主共よく々々心得候て数多の魚民

等に至迄皆々のみこみ居候様ニよく々々おしへ

さとし可申事

右異船帰帆の御達

今度異船着岸の節守衛相整候付自

公辺蒙御賞詞於拙身数多の面目不

過之儀候実ニ是文武二公の御遺烈ニ候所

常々其方共能先訓ヲ不忘年々調練

武門の令ヲ相守老雅の病患ヲも打

棄速ニ致進発候族も有之由人臣の

節厚心掛候故の儀と不堪感欣候

向後尚更心得肝腰に候仍揮禿

筆論一同如件候也

文政七年甲申七月

御書判

前件小者共ニ至迄。各所可申達候此事

好事者の雜説紛々相聞不通事情

の輩生風竊之憂ものも難計候仍

公辺御裁許の□書相濟候一同可致

承知者也

文政七年（一八二四）夏異国伝馬船が
大津浜へ上陸した時の記録書

一冊

松 蘿 蔵 書